

# 富岡冬野

## 清水あかね

富岡鉄斎を祖父に持つ冬野は明治三十七年に京都に生まれ、十六歳で信綱に師事。めきめきと頭角を現し、大正十四年には第一歌集『微風』を刊行する。しかし、夫と上海に渡り昭和十五年、三十五歳の短い人生を閉じてしまう。

昭和の初め、冬野は幼馴染の医大生松崎啓次と結婚した。周囲の反対を押し切つての学生結婚であった。そして冬野は歌作から遠ざかる。医者にはならず映画の道に進んだ松崎と冬野は、この時期プロレタリア運動にその痕跡を残す。松崎はプロキノと呼ばれる「日本プロレタリア映画同盟」に参加した。「三・一五事件」でも検挙されている。冬野もこの頃は松崎流子という名で「戦旗」やプロキノの準機関紙「新興映画」に寄稿した。「新興映画」昭和四年十一月号には当時の人気女優を批判する「クララ・パウとその影」という評論が掲載されている。アメリカ映画の明るく自由な職業婦人は実は女性としての武器を利用

して上司に媚びている、このことを「封建的貞操観に対する反逆のように見えるが、実はその拡大にすぎない」と手厳しい。

すさまじい読書家で漢文や西洋文学にも通じ、社会主義理論も松崎以上に勉強していたという冬野。やがてプロレタリア運動は急速に衰える。そして松崎は商業映画に転じて成功を取めた。転々と不安定な生活を送っていた夫妻は、上京し安定した生活を送るようになる。しかし、冬野の気持ちには晴れなかつた。作歌を本格的に再開したのもこの頃のようにだ。没後編まれた歌文集『空は青し』には次のような歌がある。

- あきらめて物云はぬ妻の眼のはしに映りて消えて山桜ばな
- 遠くみて人は何をか思ふらむありなれてふりし妻となりけり
- 西風のまどの下べにながながと昼も眠れりなまけもの妻

志を捨てて、商業映画に転じた夫。松崎は東宝の文化映画課長として活躍するよう

になるが、文化映画とは国策映画のことだ。時代の流れとは言え、プロレタリアの闘士から完全な転向である。潔癖な冬野には忸怩たるものがあつたであろう。一首目の歌などは、そんな夫へのあきらめの気持ちが読み取れる。二首目は出張の多い夫との物理的な隔たりを詠みつつ、主眼は心情的な隔たりにある。三首目は何もできない自分への苛立ちを戯画化しながら歌つた。成城のはずれの砧村で、子供のいない冬野は犬や猫を友とし、故郷の京都を恋いつつ不在がちの夫の帰りを待ったという。

昭和十四年、上海に中華電影公司を設立し、制作部長として赴任する松崎に従い冬野は中国に渡る。松崎との時間を大事にすると同時に、中国文学に明るい冬野の文字上の飛躍を期待しての大陸行きであつた。死はその矢先に訪れる。

慣れない異国での暮らしは冬野の死期を早めたかもしれない。しかし上海に行き冬野は五六首の珠玉の短歌を残した。またその死は夫に看取られての死でもあつた。上海詠には次のような歌もある。

- げんげ田に夕風立てば幼くて母にせしごと夫によるかも